埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第25集

備　前　堀　端　遺　跡

1990. 3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第25集

備前堀端遺跡

（びぜんぼりばたいせき）

1990. 3

深谷市教育委員会

序

深谷市では、秩序ある総合都市の完成を目指して様々な事業を推進中であります。福祉事業もその一環でありますが、高齢化社会や生涯学習に対する社会的関心が高まっている今日、その内容も益々多角的かつ広範囲に及んでおり、今や市政の根幹を成す最も重要な事業の一つとなっております。

この様な福祉事業の充実を画るべく、深谷市では市内大字沼尻地内に老人福祉センターを建設し、市内大字上野台地内に既設の仙元荘と合わせて、一人でも多くの高齢者の方々に活動の場を提供していく事といたしました。この建設に先立ち、教育委員会が予定地の確認調査を実施した結果、中世のものと思われる墓を発見し、その発掘調査の結果として、ここに報告書を刊行する事となりました。参る人も絶え、忘れられて久しいこの墓の主について知り得た事は多くはありません。しかし、今日の小山川の川辺に立ちましても、この「坂東太郎」へと連なる流れを望む地に葬られた者たち、そして彼らを見送ったであろう者たちの姿が目前に浮かんでまいります。この人々にどの様な物語が在ったのか、今となっては知る術もありませんが、乱世の中、この地を駆け抜けていったであろう祖先の姿を窺い得た事で、私達現代人はこの深谷の地と人との結びつきを改めて考えさせられた気がいたします。

発掘調査にあたり、関係者の皆様や地元の皆様には大変お世話になりました。ここに心よりの感謝を申し上げ、序といたしたいと思います。

平成２年３月

深谷市教育委員会

教育長　鳥　塚　恵和男

例　　言

1．本書は、埼玉県深谷市大字沼尻備前堀端482－1外所在遺跡における、老人福祉センター建設工事に伴う発掘調査報告書である。事業名は、備前堀端遺跡とした。

2．発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となって実施した。現地発掘調査期間は平成元年5月19日～6月15日、調査面積は約600㎡である。

3．調査経費は、平成元年度老人福祉センター建設費より支出した。

4．本書の執筆、編集及び写真撮影は、古池晋禄が行った。

5．挿図中の方位は座標北を示す。また、垂直図版における実測レベルは、33.500mに統一した。なお、遺構の説明における数値は確認面においてのものである。

6．出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

7．本書の作成にあたり、下記の方々から御助言・御指導を賜った。（敬称略）

小俣　悟、柿沼幹夫、金子正之、酒井清治、持田　勉

発掘調査の組織

調査主体者　深谷市教育委員会　教 育 長　鳥塚恵和男

教育次長　飯島　光武

事　務　局　深谷市教育委員会社会教育課　課　　長　飯島　光武（兼務）

課長補佐　須長　欣二

文化財保護係長　田中島　功

主　　任　関根　広子

主　　事　澤出　晃越

調査担当者　深谷市教育委員会社会教育課　主　　事　古池　晋禄

調査参加者　相沢　恵、落合成子、加瀬律子、加藤佳子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、里山まり子、清水清子、鈴木令子、砂田伊久子、関口より子、高橋豊子、滝口知子、玉瀬静枝、都築百合子、土師澄子、細川ケイ、水野祥代、本橋玲子、森　光代、湯沢直子、渡辺哲子

目　　次

序
例言
目次

Ⅰ．発掘調査に至る経緯……1

Ⅱ．遺跡の地理的環境と周辺遺跡……1

Ⅲ．調査の概要……3

Ⅳ．検出遺構及び出土遺物……4

Ⅴ．結語……16

写真図版

挿　図　目　次

第１図　周辺の主要遺跡位置図　（１／40,000）
第２図　調査区周辺地形図　（１／5,000）
第３図　調査区全測図　（１／400）
第４図　Ａ区検出遺構平面図　（１／40）
第５図　Ａ区土層断面図　（１／40）
第６図　Ａ区出土遺物(1)　（１／４）
第７図　蔵骨器(3)蓋石概要図　（１／４）
第８図　Ａ区出土遺物(2)　（１／３）
第９図　Ａ区出土遺物(3)　（１／４）
第10図　Ａ区出土遺物(4)　（１／４）
第11図　土葬人骨出土状態　（１／20）
第12図　Ｂ・Ｃ区土層断面図　（１／40）
第13図　Ｂ区出土遺物　（１／３）
第14図　Ｃ区出土遺物　（１／３）

Ⅰ．発掘調査に至る経緯

深谷市は埼玉県北部に位置し、利根川を挟んで群馬県と接する地域に広がっている。近年では県北部でも著しく都市化の進行している深谷市であるが、室町時代には深谷上杉氏の拠点として、また、江戸時代には中仙道や利根川水運の要衝として繁栄してきたという、多彩な歴史的側面も合わせ持っている。そして最近では近代日本経済界の偉人、渋沢栄一の生地としても、各方面からの注目を集めている。

深谷市では最近の人口増加に伴い、より一層の福祉サービスの強化を目指して、従来より高齢者の活動の場として提供してきた「仙元荘」に加えて、市内大字沼尻字備前堀端地内に新たなセンターを建設し、市内北部の利用者にも便宜を画る事となった。これに伴い、事業担当課である市福祉健康部福祉課は、市教育委員会に確認調査を依頼した。これを受けた市教育委員会が３月23日及び４月20日に調査を実施し、予定地内に中世墓及び遺物包含層の存在を確認した。この結果に基づいて市福祉健康部福祉課と市教育委員会は協議を重ね、平成元年５月12日付にて発掘調査に係る業務委託協定を取り交わした。市教育委員会は埼玉県教育委員会に対して深谷市№60-257遺跡としての確認を報告すると共に埋蔵文化財発掘調査通知書（平成元年５月17日付深教社発第420号）を提出、発掘調査の準備に入った。

Ⅱ．遺跡の地理的環境と周辺遺跡

深谷市の地形はほぼ南北に二分される。北部の妻沼低地と南部の櫛挽台地である。櫛挽台地は荒川扇状地の浸食面段丘であり、高位面を形成する櫛挽面（武蔵野Ⅱ面に比定）と、低位面を形成する寄居面（別称御稜威ヶ原面、立川面に比定）の二面より構成されている(註１）。一方、妻沼低地は利根川中流低地を形成しており、南は荒川低地、東は加須低地に連なる。現在では一様に平坦な姿を見せているが、嘗ては各所に自然堤防が発達していたものと思われる。市内北西部に残る血洗島、矢島、大塚島、内ヶ島といった地名はその当時の名残りである。また最近の発掘調査では、過去の大地震の痕跡である噴砂現象がしばしば確認されており、注目を集めている。

備前堀端遺跡はこの妻沼低地中央部、利根川の支流である小山川の南岸部に位置し、推定範囲約3,500㎡を以て広がっている。標高は約33.5mである。

本遺跡周辺では、縄文時代後・晩期が現時点の確認の上限となっており、諏訪台遺跡において該期の遺物が出土している（註２）。弥生時代になると、上敷免遺跡における中期（須和田期）の再葬墓が有名である（註３）。しかし、両時代とも集落的把握を成すまでの資料が確認されていないのが現状である。古墳時代後期以降、遺跡数は増加、前述の上敷免遺跡とその北方に位置する上敷免北遺跡において古墳時代後期～平安時代中期に至る集落の存在が確認されている（註４）。この他にも４箇所の遺物散布地が確認されており、何れも集落跡と推定されている。確認された集落の殆どは小山川南岸に位置している。中世以降では鎌倉時代初頭の新開荒次郎実重館跡が対岸に所在している。

また、歴史的環境も豊かである。本遺跡の南方約140mの地点を東西に流れ、小字名の語源ともなっ

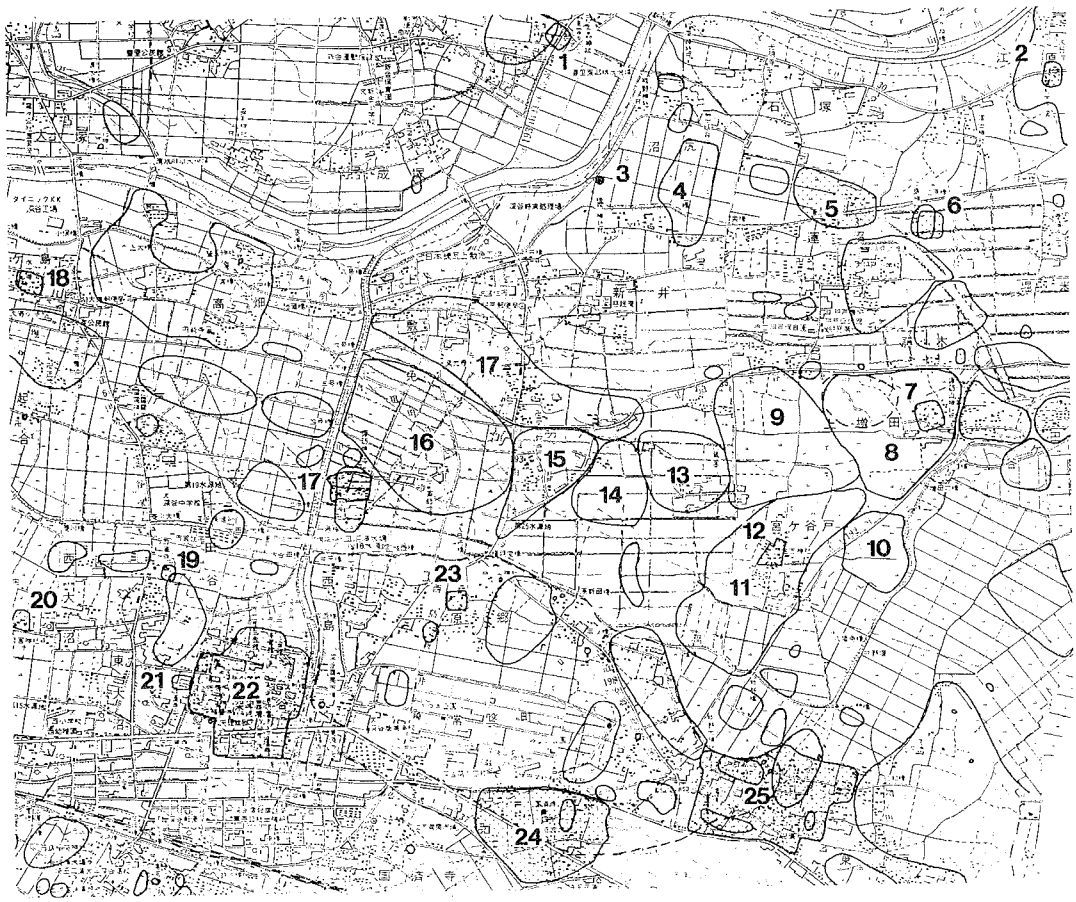
た備前渠は、慶長８年（1604）に当時の関東郡代、伊奈備前守忠次によって開鑿された潅漑用水路であり、西方約600mに所在する日本煉瓦製造株式会社は、明治20年（1887）、渋沢栄一等の創設であり、操業は現在に至っている。

註１　堀口　万吉　『Ⅱ　埼玉県の地形と地質』「埼玉県史　別編３　自然」　1986　埼玉県

註２　澤出　晃越　「諏訪台遺跡」1988.3　深谷市教育委員会

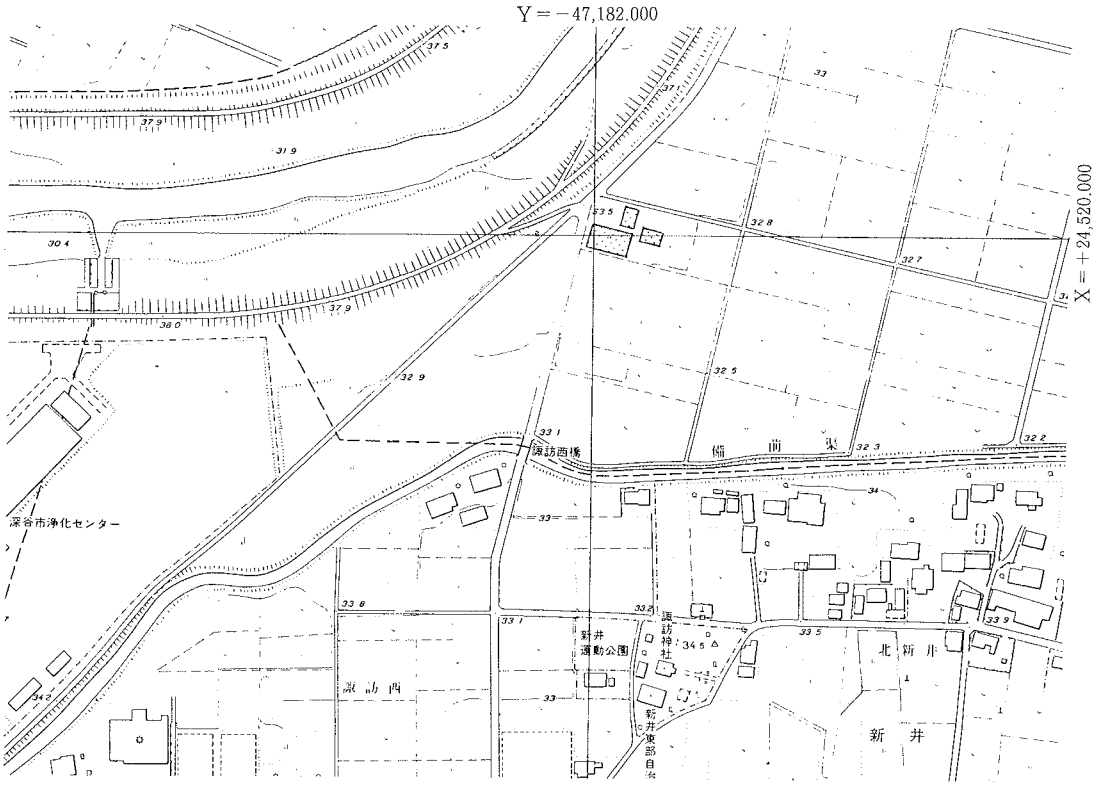
註３　蛭間真一他　「上敷免遺跡」1978.3　深谷市教育委員会

註４　澤出　晃越　「上敷免遺跡（第２次）・上敷免北遺跡」1985.3　深谷市教育委員会



１．新開荒次郎館跡　２．荏原氏館跡　３．備前堀端遺跡　４．諏訪台遺跡　５．ウツキ内遺跡
６．蓮沼氏館跡　７．増田氏館跡　８．原遺跡　９．明戸東遺跡　10．東川端遺跡　11．宮ヶ谷戸遺跡
12．堀の内遺跡　13．新田裏遺跡　14．新屋敷東遺跡　15．本郷前東遺跡　16．上敷免遺跡　17．上敷免北遺跡
18．内ヶ島氏館跡　19．大沼弾正忠屋敷跡　20．桜田馬場　21．深谷町遺跡　22．深谷城跡
23．伝幡羅太郎館跡　24．庁鼻和城跡　25．東方城跡　※スクリーントーンは、中・近世の遺跡

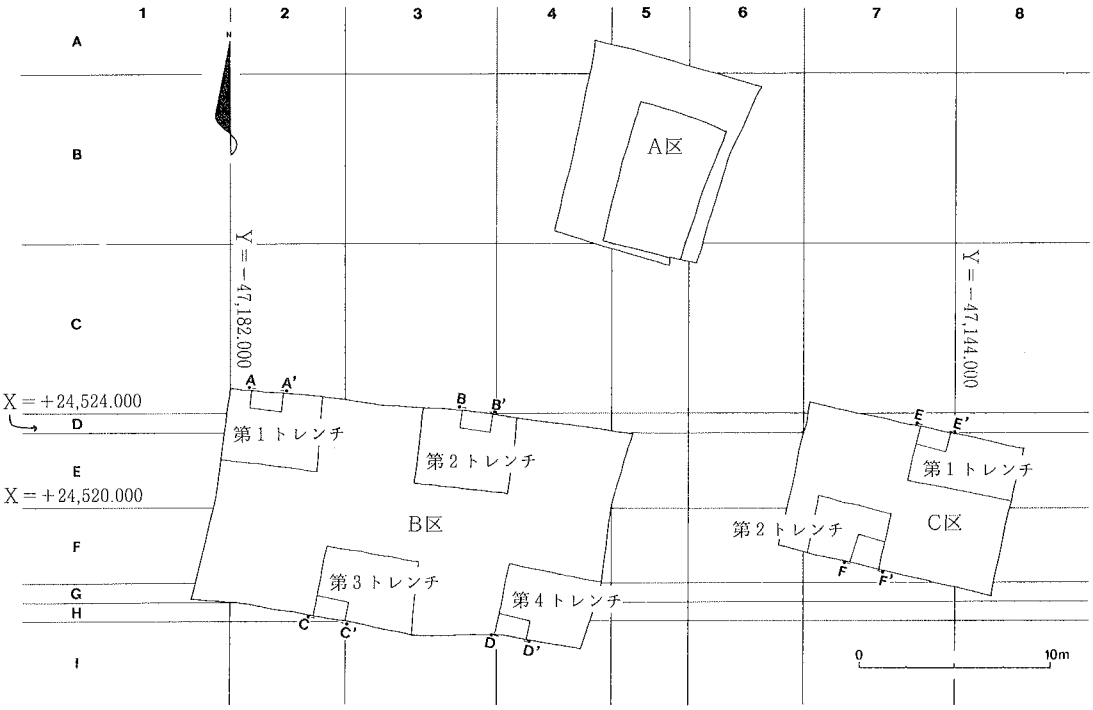
第１図　周辺の主要遺跡位置図（１／40,000）



第２図　調査区周辺地形図（１／5,000）

Ⅲ. 調査の概要

平成元年５月17日、確認調査による遺構・遺物の確認範囲を中心に重機による表土削除を開始、Ａ・Ｂ・Ｃの３区を設定した（第３図）。19日、Ａ区中世墓検出地点における墓前供養を作業員全員で行った後、発掘器材を搬入、調査を開始した。Ａ区は精査の後、遺構の残存範囲の確認と調査区の拡大を併行する。29日より記録図面の作成を開始した。Ｂ区は区内にトレンチを４箇所、Ｃ区は２箇所を任意に設定、精査を開始する。同時に各トレンチ内に更にサブグリッドを設定し、層序の確認も併行した。６月５日、Ａ区は中世墓出土遺物取上げをほぼ完了、Ｂ・Ｃ区は記録図面の作成に着手する。13日、Ｂ・Ｃ区は全ての作業を終了、Ａ区の全測図作成を残すのみとなる予定であったが、調査区北西部より新たな人骨が検出されたため、急遽サブトレンチを設定、その記録化を最優先とした。人骨はその出土状態より土葬されたものと推定されたが、この様なケースの調査例は本市初であったため、作業進行上の法的問題の有無を深谷警察署に照会、関係者の検証を待って調査を続行する事とした。検証後、人骨の取上げ及びＡ区全測図作成を完了、15日には現地発掘調査の全作業を終了した。



第3図　調査区全測図（1／400）

Ⅳ．遺構及び出土遺物

今回の発掘調査による検出遺構はA区の中世墓1基のみであり、B・C区は遺物包含層の形成の確認に留まった。

本項では各調査区の概要及び出土遺物について記述していく事とする。

i．A区検出遺構及び出土遺物（第4図～第10図）

i－(1)　中世墓（第4図・第5図）

B－5グリッドより検出された。確認面は地表下約20cmである。文中の遺物番号等は挿図中のそれを指している。

○積石

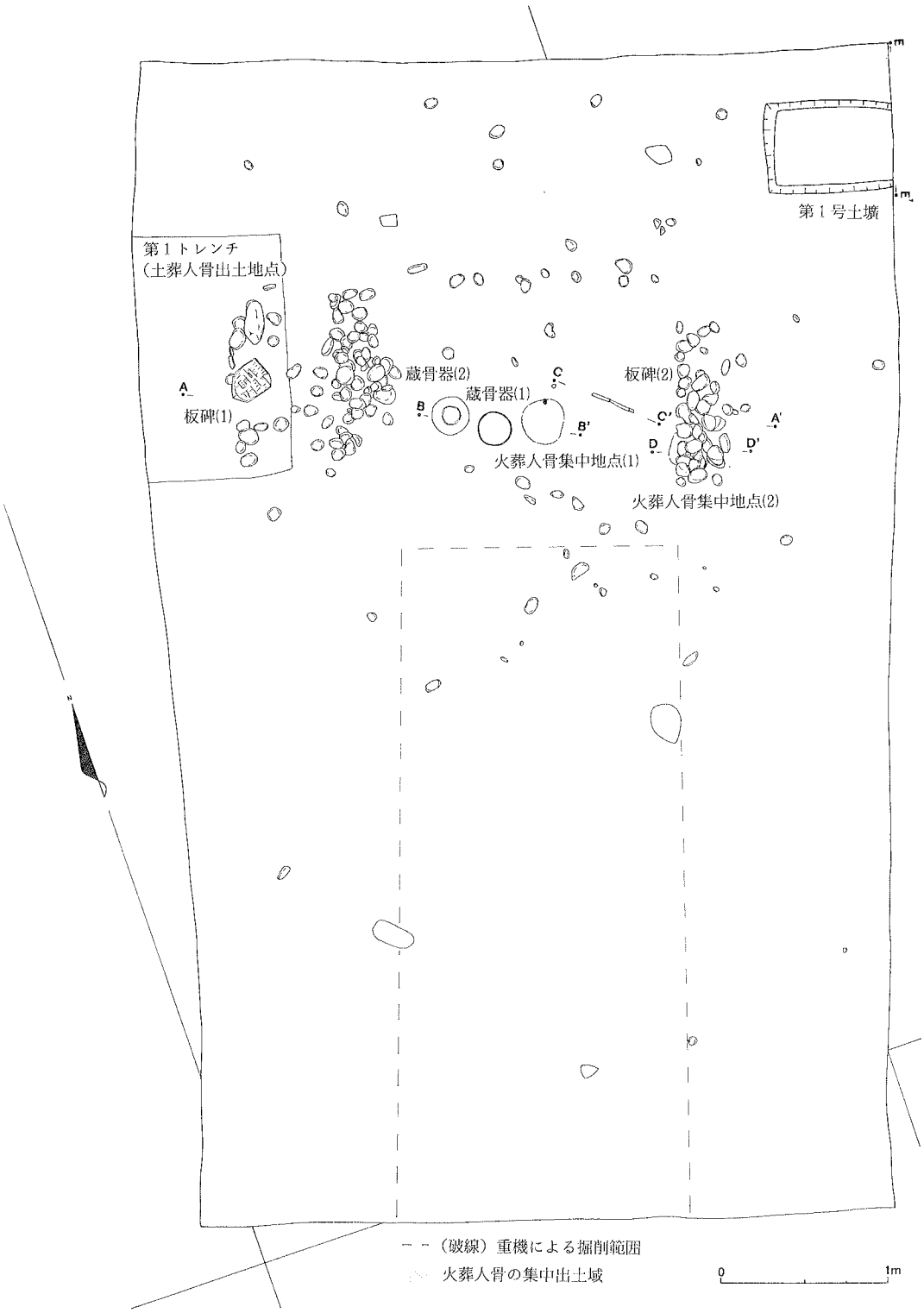
南北約4.5m、東西約4.0mの範囲で検出され、特に検出範囲のほぼ中央部、南北約1.3m、東西約3.2mの範囲においては一部に高さ約20cmの盛土上に2～3段の積み上げが確認された。積石には直径約10cmの平滑な円礫が主として使用されている。

○板碑

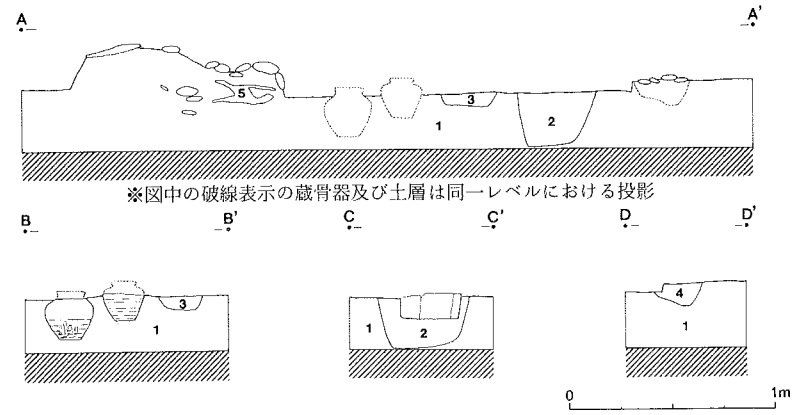
2基出土した。板碑(1)は積石上に裏面を見せて倒れており、板碑(2)は(1)の東方約2.0mの地点に埋設された状態で出土した。掘り方は長径約40cm、深さ28cm、基部の埋設長は13cmである。

○蔵骨器

3個体が出土した。蔵骨器(3)は確認調査時に取上げざるを得なかったため、埋納時の原位置は不明



第4図　A区検出遺構平面図（1／40）



A区土層断面

1	暗茶褐色土	炭化粒子・焼土粒子・白色粒子を含む	しまりやや強	粘性弱
2	暗灰褐色土	焼土粒子・白色粒子を多量に含む	しまり強	粘性弱
3	火葬人骨集中地点(1)			
4	火葬人骨集中地点(2)			
5	炭化物層	焼土粒子を多量に含む		
6	暗黄黒褐色土	暗茶褐色土をブロック状に含む	しまり弱	粘性弱

第５図　Ａ区土層断面図（１／40）

である。蔵骨器(1)及び(2)は互いに約６㎝間隔と約10㎝のレベル差を以て埋納されている。

○　火葬人骨集中地点

２箇所検出された。(1)地点は直径約30㎝、深さ約８㎝、(2)地点は直径約20㎝、深さ約14㎝で、両地点とも少量の炭化物と共に人骨が充填されていた。特に(2)地点は出土した人骨量が多い。共に平面プラン不整円形を呈する小土壙への埋納であろう。

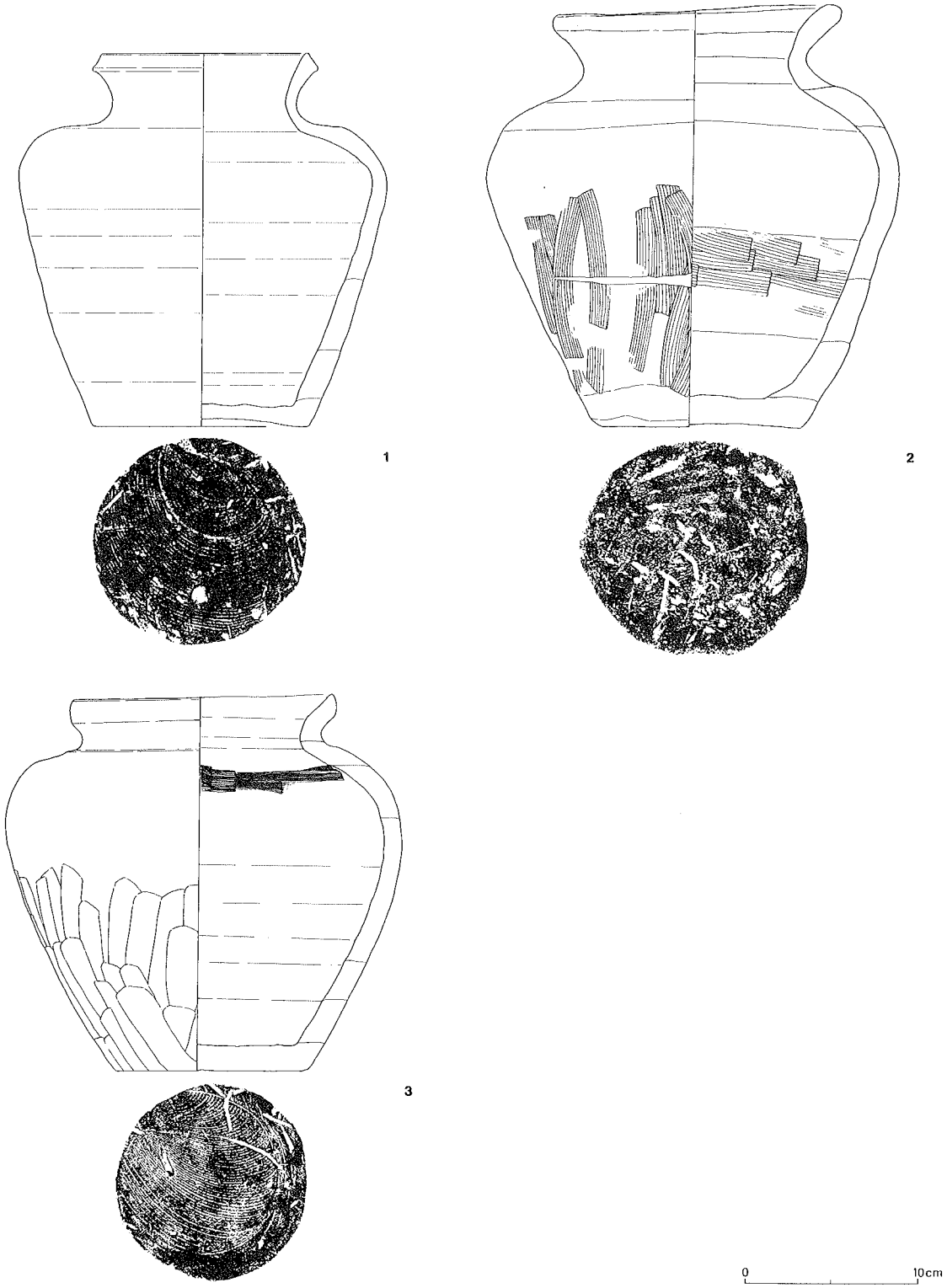
ｉ－(2)　第１号土壙

Ｆ－２グリッドより検出された。東半部は調査区外のため、形状、規模については不明である。長軸現長79㎝、短軸57㎝、深さ18㎝を測り、平面プランは長方形を呈するものと推定される。壁はやや外反気味に立ち上がる。出土遺物は無かった。

ｉ－(3)　中世墓出土遺物（第６図～第10図）

第６図１～３　蔵骨器に使用された壷型土器である。

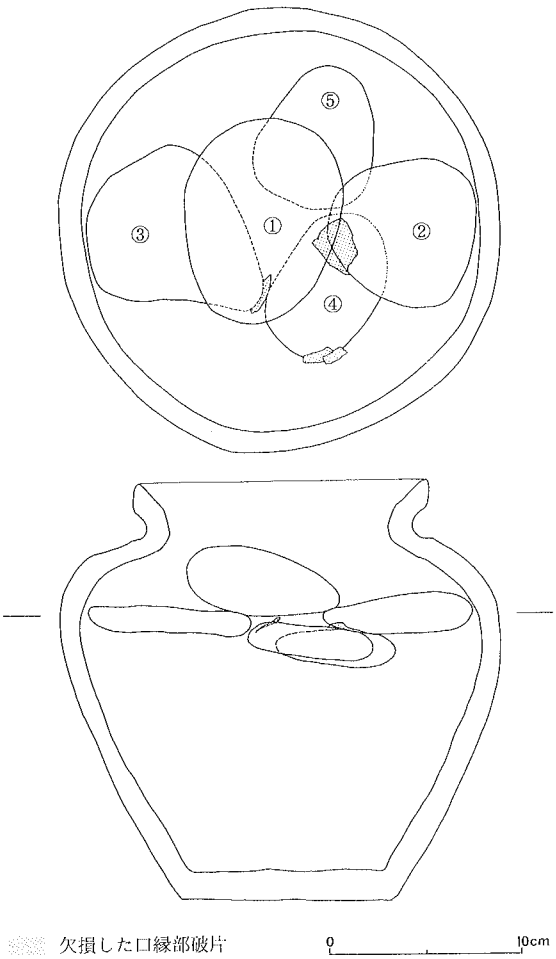
１．推定口径11.8㎝、器高22.1㎝、胴径21.4㎝、底径12.5㎝。確認調査時に肩部以上を欠損したが本来はほぼ完形を保っていたと思われる。肩部は強く張り、底部にかけて直線的な胴形をなしている。広めの口頸は若干外湾しつつ立ち上がり、斜方向の縁帯を形成する。粘土紐巻き上げ成形後、内外面にロクロ調整が施され、外面は更に口縁部から肩部に撫で整形、肩部から底部に幅約８㎜の縦位の磨き調整が施されている。底部は回転糸切痕を明瞭に残す。胎土は小石を少量含みやや粗い色調は上半部及び下半部の一部が内外面共に黒灰色、その他の部分が暗黄灰色を呈する。胴部の一部が剥落している。口縁部から肩部の一部に、暗褐色を呈する付着物が認められる。



第6図　A区出土遺物(1)（1／4）

２．口径16.0㎝、器高24.6㎝、胴径24.0㎝、底径11.5㎝。確認調査時に口頸部を欠損したが、本来は完形である。肩部は「く」状に屈曲し、底部にかけて若干内湾する胴形を成す。やや細めの口頸は短く外反し、口縁部先端は丸みを帯びている。全体的に歪みが認められる。粘土紐巻き上げ成形後、内面には口縁部から肩部及び胴部下半に指頭による撫で整形、胴部上半に櫛状工具による横位の撫で整形が施され、外面には口縁部から肩部に指頭による撫で整形、胴部に櫛状工具による縦位の撫で整形が粗く施されている。工具の幅は1.2㎝。底部整形痕は余り明瞭ではない。胎土は小石を多量に含み極めて粗い。色調は明赤褐色を呈する。

３．推定口径15.1㎝、器高22.1㎝、胴径23.1㎝、底径11.3㎝。確認調査時に口頸部の一部を欠損したが、これ以前に既に一部を欠損していたものと思われる。肩部がやや強めに張り、底部にかけて若干内湾する胴形を成す。広めの口頸は外湾し、僅かに縁帯を形成している。粘土紐巻き上げによる成形と思われる。内面は口頸部及び胴部にロクロ調整、肩部に櫛状工具による横位の撫で整形が施され、外面は口縁部から肩部に撫で調整、胴部に縦位或いは斜位の幅約1.5㎝の篦削り調整が施されている。底部には回転糸切痕を明瞭に残す。胎土は細砂粒を含み密。色調は胴部の一部が茶褐色又は暗橙色、他の部分が暗褐色を呈する。肩部以下に黒色の付着物が斑状に認められる。器内より蓋石とされた円礫が五点検出されている。詳細は以下の通りである。

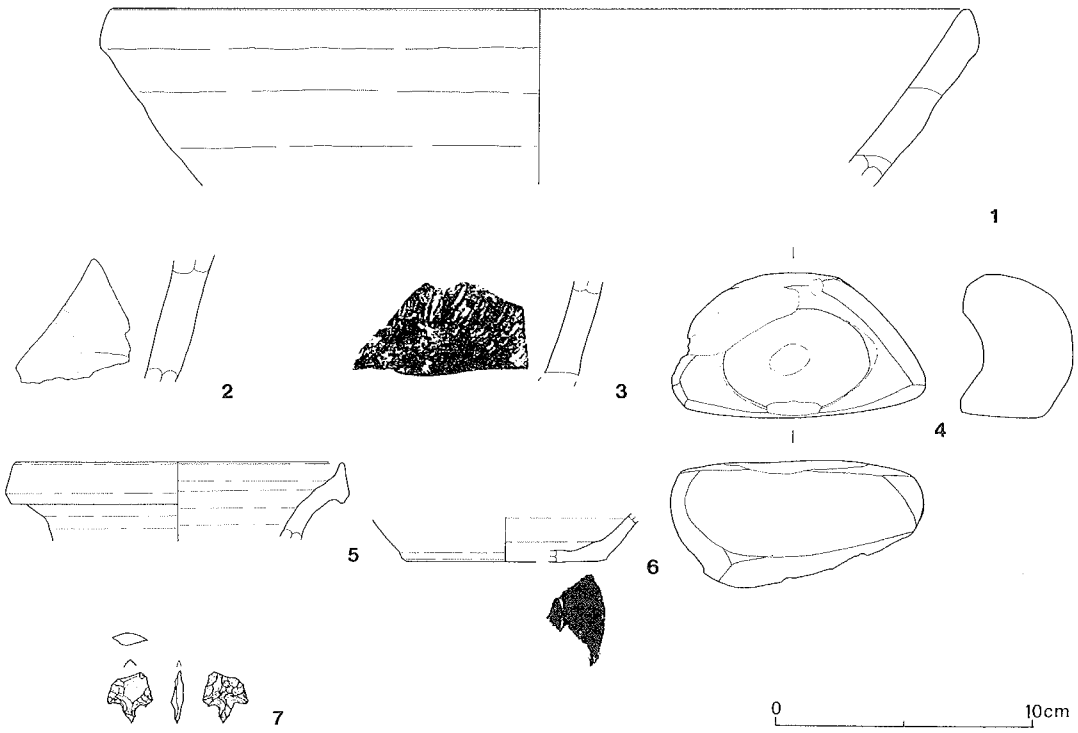


第７図　蔵骨器(3)蓋石概要図（１／４）

第７図①　長径10.7㎝　短径8.2㎝　最大厚3.3㎝　重さ340ｇ
　　②　直径 約8㎝　　最大厚2.9㎝　重さ182ｇ
　　③　長径10.1㎝　短径8.7㎝　最大厚1.3㎝　重さ172ｇ
　　④　長径 8.3㎝　短径5.4㎝　最大厚1.6㎝　重さ128ｇ
　　⑤　長径 7.9㎝　短径6.3㎝　最大厚2.1㎝　重さ149ｇ

写真図版６－１．青磁破片である。器面に蓮弁状の刻文が施されている。釉薬は青緑色に発色し、厚くかけられている。胎土は明灰白色を呈し、微細である。焼成は堅緻。蔵骨器(2)の胴部下半付近の覆土中より出土。

第８図１．口縁部破片である。胎土は橙灰色を呈し、粗い。焼成は堅緻。鉢類の一部と思われる。



第８図　Ａ区出土遺物(2)（１／3.）

積石部より出土。

２．胴部破片である。器面に釉が認められる。胎土は暗黄灰色を呈し、やや粗い。焼成は堅緻。壷或いは甕の一部であろう。積石部より出土。

３．胴部破片である。器面にハケ目状の調整痕を残す。胎土は黄灰白色を呈し、やや粗い。焼成は堅緻。積石部より出土。

４．石製品であろう。図中正面に5.8cm×3.2cmの凹みが作出され、周囲に面取りが施されている。図中下面に磨痕が認められる。石質は角閃石質安山岩。積石部より出土。

第９図　板碑である。１．現長27.9cm、幅21.0cm、最大厚3.3cm。塔身部以上を欠失する。基部先端は逆三角形を呈す。表裏共面に明瞭なノミ痕を残す。折損部に枠線の一部を残し、金彩を留めている。

２．現長17.9cm、幅29.5cm、最大厚2.35cm。塔身部以上を欠失する。基部先端は方形を呈する。表裏両面に明瞭なノミ痕を残す。

１・２共に石質は緑泥片岩である。

第10図　石造物の一部と思われる。

１．現存長上辺15.5cm、下辺10.3cm、現存高12.3cm。欠損・風化が著しいものの、面取りの形跡が窺える。石質は角閃石質安山岩。地輪の可能性がある。

２．現存高18.4cm。欠損・風化が著しいが、加工された痕跡が認められる。石質は輝石安山岩。

本図所載以外に、角閃石質安山岩の破片が４点出土している。

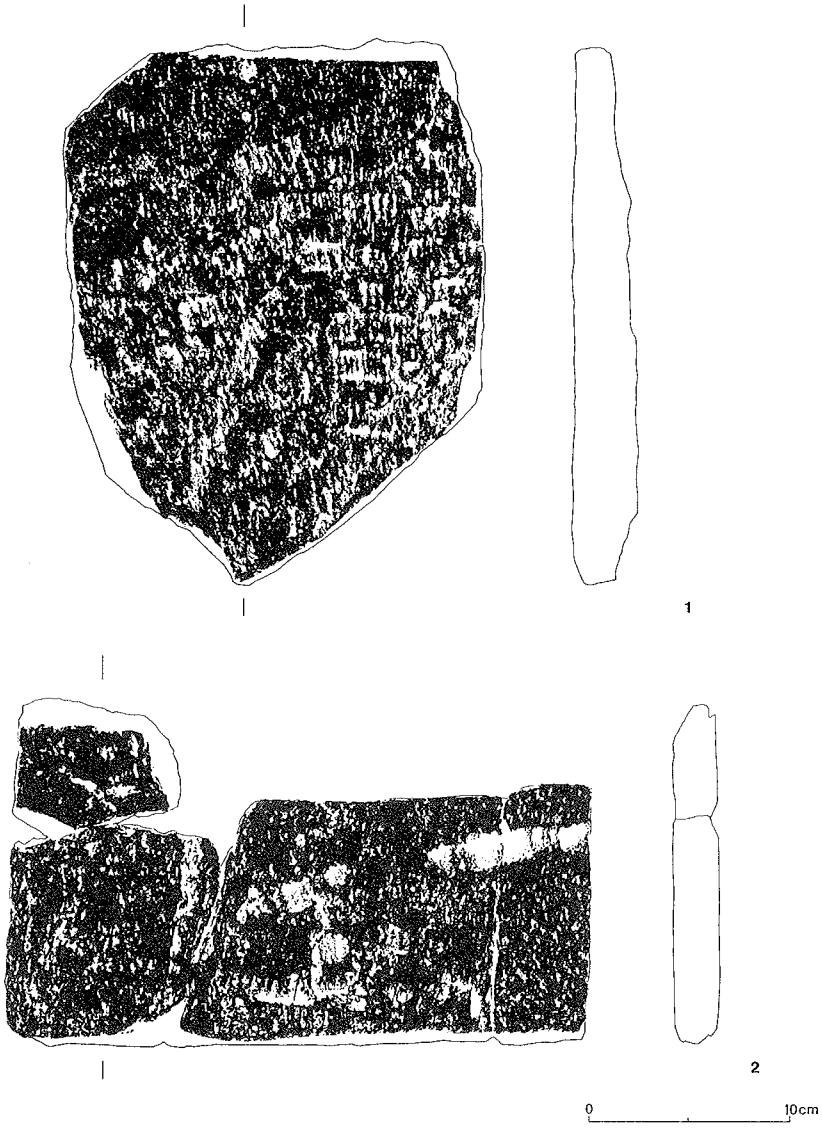
ｉ－(4)　Ａ区出土遺物（第８図・写真図版６－２）

写真図版６－２．灰釉陶器破片である。釉薬は薄い。胎土は暗灰白色を呈し、密。焼成は堅緻である。

第８図５．須恵器壷の口縁部破片である。推定口径12.9cm、現存高3.1cm。胎土は滑石を含みやや粗い。色調は暗青灰色を呈する。

６．土師器坏の底部破片である。推定底径7.8cm、現存高1.1cm。底面に回転糸切痕を残す。胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は黄灰白色を呈する。

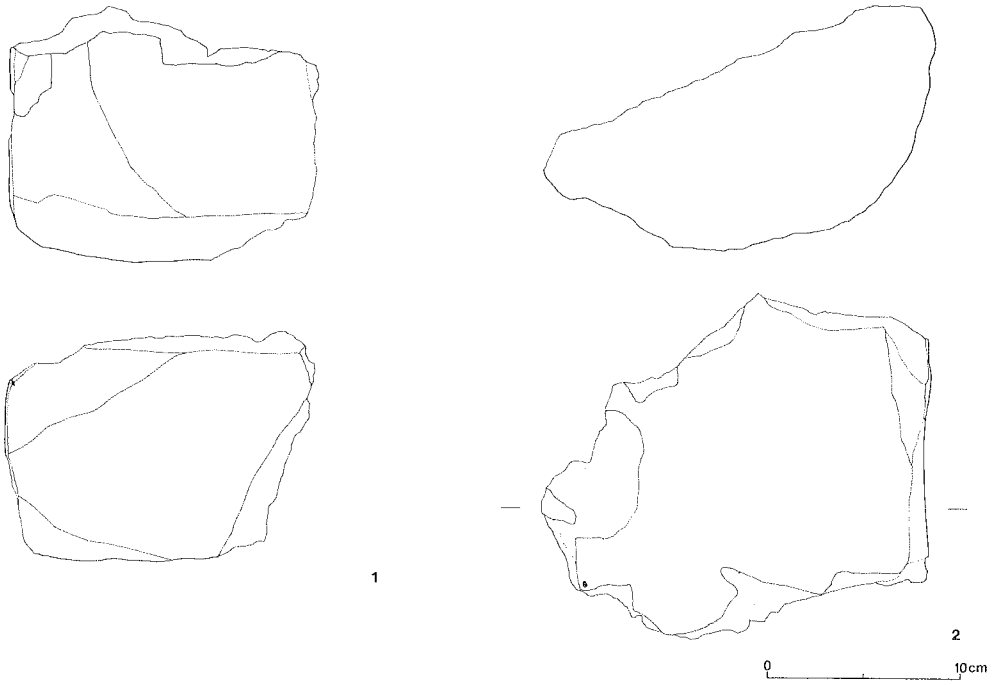
７．石鏃である。現存長2.1cm、最大幅1.8cm、最大厚0.5cm、現重350mg。先端部を欠損する。形態は凸基有茎、一部に主要剥離面を残すが、調整剥離は表裏両面共に丁寧である。石質は瑪瑙の一種と思われる。



第９図　Ａ区出土遺物(3)（１／４）

ｉ－(5)　中世墓出土人骨（写真図版４・５）

写真図版４－１．蔵骨器(1)（第６図１）内検出で、検出総重量は1,090ｇ。内訳は頭蓋骨部435ｇ、脊柱部60ｇ、手足骨部50ｇ、骨頭部90ｇ、その他の部位を含む上下肢骨部265ｇ、判別不能が295ｇである。頭蓋骨部は遺存状態が良好で、下顎骨左半部を除くかなりの部分が認められる。歯は切歯２本、犬歯１本を確認した。脊柱部は損壊が著しく明確ではないが、頚椎から胸椎にかけての部位と思われる。肋骨部も損壊が著しく具体的部位は不明である。手足骨部は、指骨、中手骨を主体としており、手根骨らしき部位も少量認められる。骨頭部も損壊が著しいが、大腿骨や橈骨のものが遺存している。



第10図　A区出土遺物(4)（1／4）

その他の部位を含む上下肢骨部では、右鎖骨、上腕骨、尺骨らしき部位も窺い得るものの、損壊が著しく、明確ではない。全体的な遺存度は出土した火葬人骨中最も良好であるが、上下肢骨を主体として炭化している部位も多量に確認されている。

また、これらの人骨は、頭蓋骨部を上半、その他の部位の大型骨片を下半として、全体的に小型骨片が混入する状態で蔵骨器内に充填されていた。

写真図版４－２．蔵骨器(2)（第６図２）内検出で、検出総重量は1,120ｇ。内訳は頭蓋骨部250ｇ、脊柱部20ｇ、肋骨部105ｇ、手足骨部35ｇ、骨頭部160ｇ、その他の部位を含む上下肢骨部215ｇ、判別不能335ｇである。頭蓋骨部は全体的に小片となっており、遺存度は余り良好ではない。歯は切歯２本を確認し、内１本は下顎骨より生えた状態を保って検出された。中切歯と思われる。脊柱部については明確なものを確認できず、可能性の高い部位を集めるに留まっている。肋骨部は全蔵骨器中最も遺存度が高いが、具体的部位は不明である。手足骨部は手部が大半を占め、指骨、中手骨、手根骨らしき部位の遺存が確認された。骨頭部も遺存度が良好で、上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨等の骨頭を確認した。その他の部位を含む上下肢骨部は橈骨、尺骨、脛骨らしき部位も窺い得るが、損壊が著しいため、明確ではない。

全体的遺存度は余り高くないものの、個々の骨片は比較的大型のものが目立っている。

これらの人骨は頭骨を底部に敷いた状態で、頭蓋骨部を下半、その他の部位の大型骨片を上半とし、小型骨片は下半に混入する状態で蔵骨器内に充填されていた。

写真図版５－１．蔵骨器(3)（第６図３）内検出で、検出総重量は945ｇ。内訳は頭蓋骨部185ｇ、肋骨部90ｇ、手足骨部20ｇ、骨頭部30ｇ、その他の部位を含む上下肢骨部185ｇ、判別不能435ｇである。

頭蓋骨部は小片となっており、下顎骨部の一部が窺い得るのみである。歯は切歯２本、臼歯１本が確認された。脊柱部は確認できなかった。肋骨部も小片のみである。手足骨部は殆どが手部らしく、指骨、中手骨、手根骨らしき部位の遺存が確認された。骨頭部も余り確認できず、尺骨のものらしき１点以外は不明である。その他の部位を含む上下肢骨部は、形状を留める部位が遺存しているものの全体的に明確ではない。

全体的遺存度は蔵骨器内検出人骨中最低で殆どが小片であった。

これらの人骨は、頭蓋骨部及びその他の部位の大型骨片を主として下半に充填され、蓋石が嵌め込まれていた。

火葬人骨集中地点(1)検出の人骨は検出総重量170ｇ。脊柱部、肋骨部、手足骨部、骨頭部、その他の部位を含む上下肢骨部に分別可能であろう。全て小破片であるが、大腿骨大転子、橈骨、指骨が認められた。

検出人骨は部分的なものである。土壙内には、少量の炭化物、小礫が混入していた。

写真図版５－２．火葬人骨集中地点(2)検出。検出総重量は910ｇ。内訳は頭蓋骨部290ｇ、脊柱部35ｇ、肋骨部95ｇ、手足骨部30ｇ、骨頭部35ｇ、その他の部位を含む上下肢骨部110ｇ、判別不能315ｇである。頭蓋骨部は小片が多いものの、上・下顎骨部の遺存が認められる。歯は、切歯７本、犬歯１本、臼歯６本（歯根部のみを含む。）を確認し、内、切歯２本、犬歯１本、臼歯４本は顎骨より生えた状態で検出されている。側切歯、犬歯、第１小臼歯、第２・第３大臼歯と思われる。脊柱部も小片のみだが、頚椎から胸椎にかけての部位と思われる。肋骨部は損壊が著しく、部位は不明。手足骨部は中手骨、手根骨及び中足骨が認められる。骨頭部は、大腿骨及び上腕骨のものと思われる。その他の部位を含む上下肢骨部は損壊著しく明確ではないが、大腿骨及び上腕骨らしき部位を確認している。

全体的遺存度は蔵骨器内検出のものに大差無い。土壙内には、人骨のみの充填で、混入物は殆ど認められなかった。

ｉ－(6)　土葬人骨（第11図）

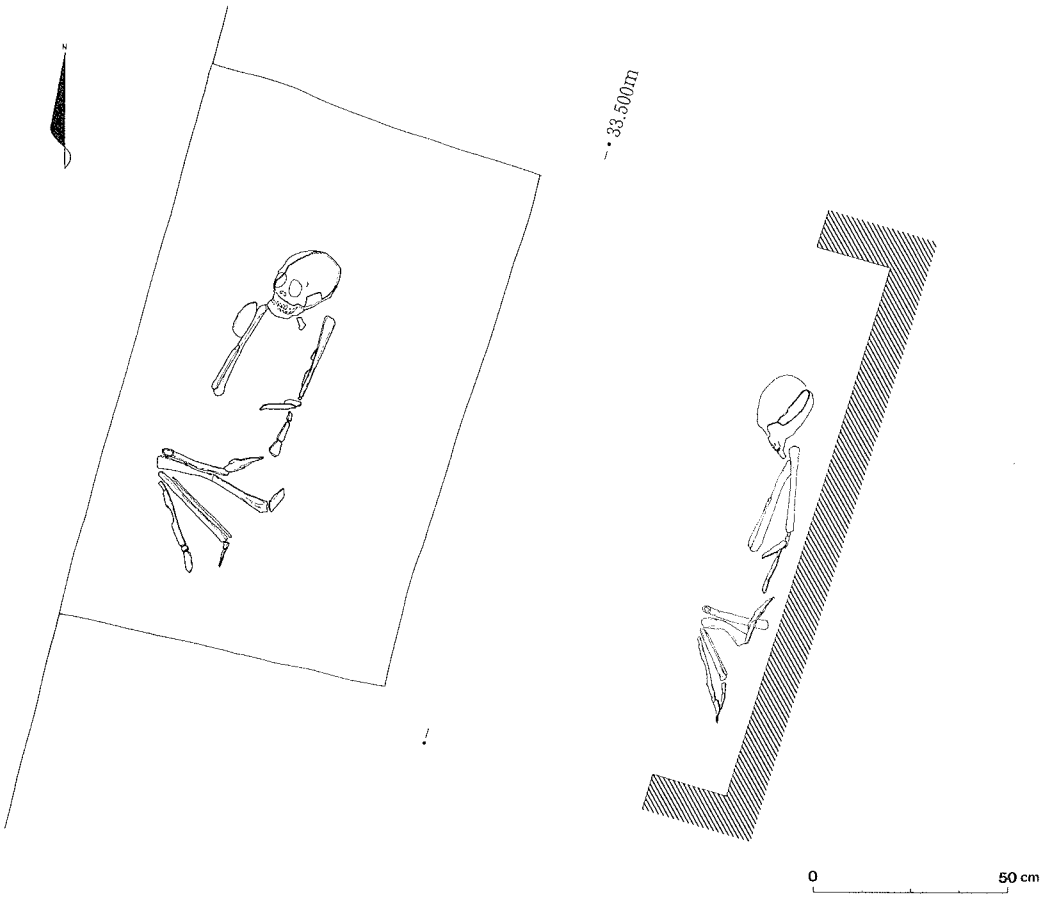
Ｂ－５グリッド検出。頭部をＮ－30°－Ｅに向け、仰臥屈葬されたものと推定される姿勢で検出された。胸部から腰部、手足部は既に失われており、頭蓋骨部、上腕骨、大腿骨、頚骨、腓骨らしき部位のみ確認された。遺存状態は極めて悪く、覆土への同化寸前であった。

本人骨は、その検出状態より土壙内への埋葬と思われる。しかし、土壙の形状については地山及び覆土が全く同質のため、その詳細を明らかにし得なかった。また、右上腕骨脇より出土した楕円礫（現長径12.8㎝、現短径8.1㎝、最大厚3.4㎝、現重390ｇ。）以外には伴出遺物も認められず、その埋葬時期についても不明である。

２．Ｂ・Ｃ区出土遺物（第13図・第14図）

Ｂ区・Ｃ区の各トレンチ内及び区内よりの出土遺物を一括した。全て包含層中よりの出土である。殆どが小破片であった。

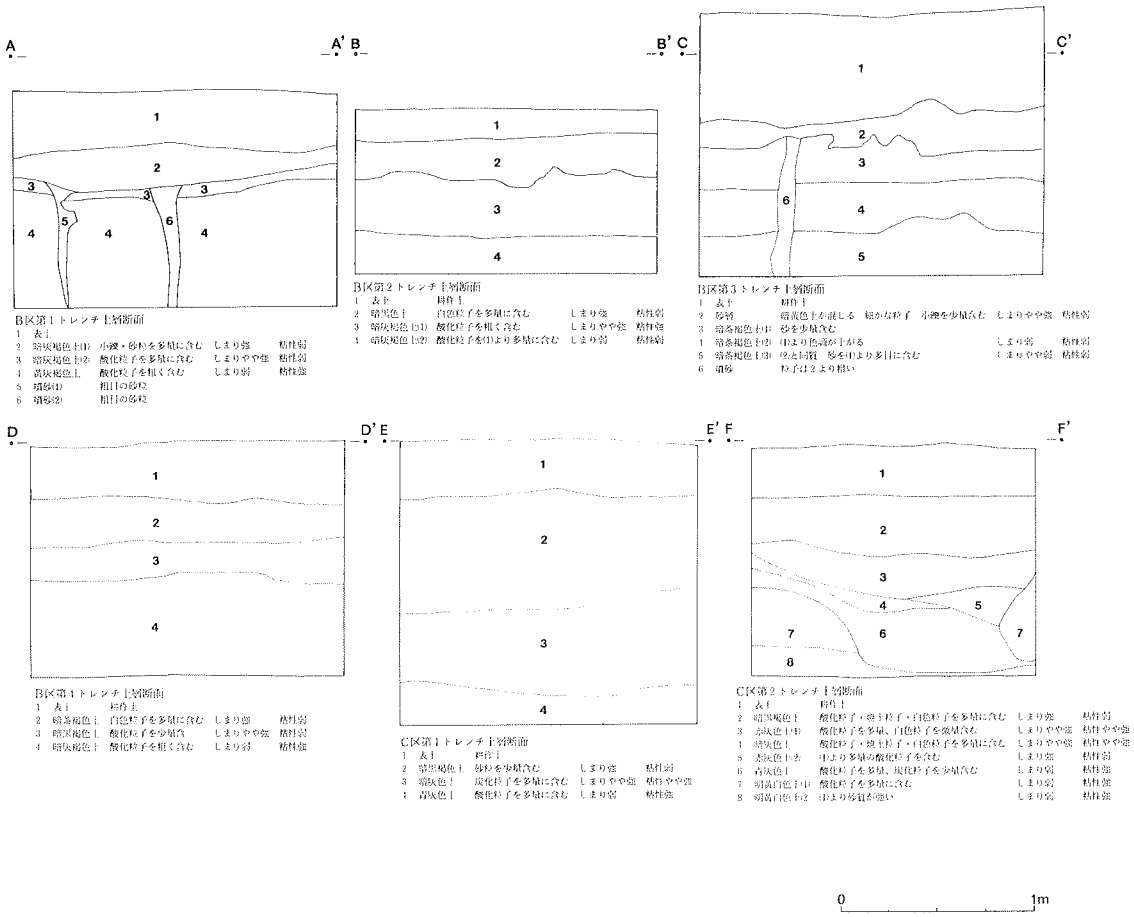
第13図１～８．坏の口縁部破片である。１．推定口径12.0㎝、現高3.0㎝、口唇部が外反する。胎



第11図　土葬人骨出土状態（1／20）

土は砂粒を多く含み粗い。色調は黄灰色を呈する。2．推定口径9.6cm、現高3.0cm、口唇部は僅かに外反する。胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は明黄灰色を呈する。3．推定口径10.6cm、現高2.0cm、口唇部は屈曲気味に外反する。胎土は密。色調は青灰色を呈する。4．推定口径14.3cm、現高1.7cm、口唇部は屈曲気味に外反する。胎土は滑石等を含み粗い。色調は暗青灰色を呈する。5．推定口径14.3cm、現高2.7cm、口唇部は肥厚気味に外湾する。胎土は白色針状物質を含み密。色調は青灰色を呈する。6．推定口径12.8cm、現高3.4cm、口唇部は僅かに外湾する。胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は暗赤橙色を呈する。7．推定口径12.9cm、現高2.9cm、口唇部は屈曲気味に外湾する。胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は橙灰色を呈する。8．推定口径14.4cm、現高3.9cm、口唇部は肥厚気味に外湾する。胎土は砂粒等を含みやや粗い。色調は青灰色を呈する。

9～14、坏の底部破片である。9．推定底径5.8cm、現高1.5cm、底面に回転糸切痕を明瞭に残す。胎土は砂粒等を含み粗い。色調は明黄灰色を呈する。10．推定底径5.8cm、現高1.0cm、底面に回転糸切痕を明瞭に残す。胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は明灰白色を呈する。11．底径5.8cm、現高1.3cm、底面は回転糸切の後、高台が添付されている。胎土は砂粒等を多く含み粗い。色調は黄橙色を呈する。12．推定底径7.2cm、現高1.3cm、高台が貼付されている。胎土は密。色調は暗赤褐色を呈する。

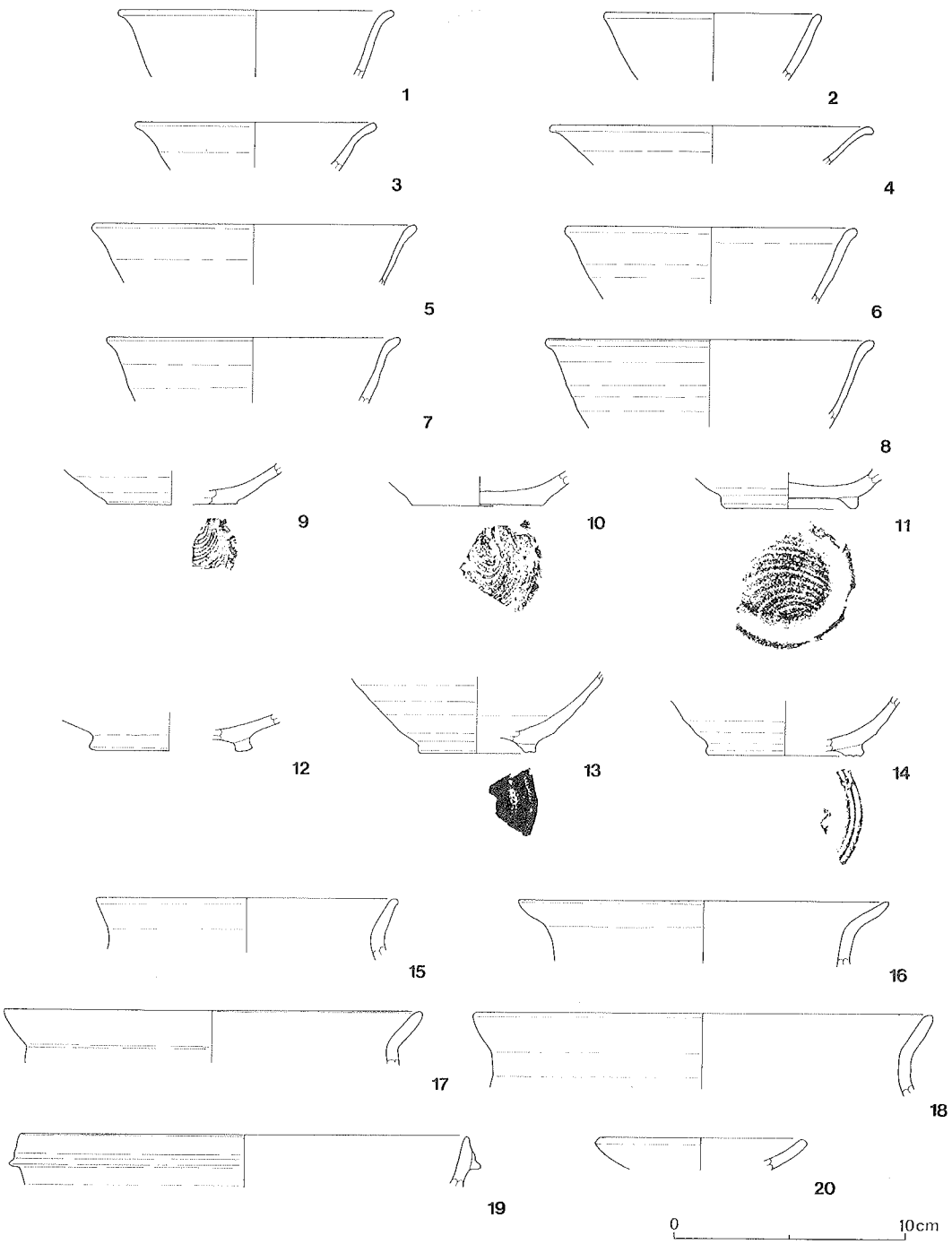


第12図　B・C区土層断面図（1／40）

13. 推定底径5.8cm、現高1.5cm、高台が貼付され、所謂畳付部に沈線状の窪みが巡っている。胎土は小礫、砂粒等を含みやや粗い。色調は暗青灰色を呈する。14. 推定底径7.0cm、現高2.4cm、高台が貼付され、所謂畳付部に沈線状の窪みが2条巡っている。胎土は砂粒を多く含み極めて粗い。色調は明黄灰白色を呈する。

15. 小型壷らしき口縁部破片である。推定口径13.3cm、現高2.3cm、口唇部に撫で整形が施されている。胎土は砂粒等を含みやや粗い。色調は赤橙色を呈する。

16～18、瓶らしき口縁部破片である。16. 推定口径18.4cm、現高2.7cm、口唇部内面は撫で整形が施されている。胎土は砂粒等を含みやや粗い。色調は明黄橙色を呈する。17. 推定口径18.5cm、現高2.4cm、口唇部内面は撫で整形が施されている。胎土は砂粒を含み密。色調は暗赤褐色を呈する。18. 推定口径20.2cm、現高3.3cm、口唇部に撫で整形が施されている。胎土は砂粒等を含みやや粗い。色調は内面暗赤橙色、外面黒褐色を呈する。19. 羽釜の口縁部破片である。推定口径19.8cm、現高2.4cm、口唇部はほぼ直立し、鍔は小振りである。胎土は砂粒等を含み密。色調は明黄灰褐色を呈する。



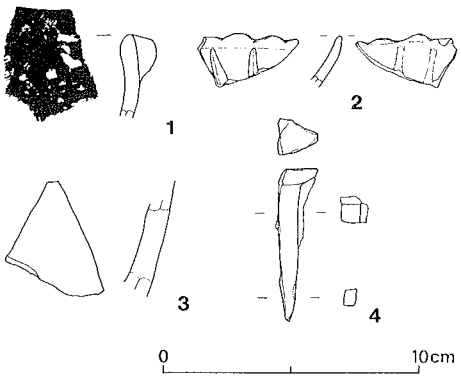
第13図　B区出土遺物（1／3）

1～6、8～10、13、14は須恵器、7、11、12、15～19は土師器或いは土師質の土器である。

20. 土師質皿である。推定口径9.4cm、現高1.5cm、胎土は軟質で密。色調は明橙白色を呈する。

写真図版8－2．黒釉陶器片である。禾目天目と思われる。胎土は密。

写真図版8－4．坩堝片である。胎土は滑石片等を含みやや粗い。色調は赤橙色を呈する。



第14図　C区出土遺物（1／3）

第14図1．縄文土器片である。口唇部に添付文と沈線文が描出されている。胎土は砂粒を多量に含み粗い。色調は内面明橙白色、外面は暗褐色を呈する。後期の所産と思われる。

2．灰釉陶器片である。口唇部が花弁状に成形され、外面が陰刻、内面が陽刻されている。胎土は密。

3．瓦質土器片である。壷の一部であろうか。内外面共にロクロ調整が施されている。胎土は滑石等を含みやや粗い。色調は内面が暗黄灰色、外面が暗青灰色を呈する。

4．角釘である。現存長6.1cm、頭は平面三角形に成形され、先端はやや薄い。基部及び脚部断面は正方形或いはやや長方形を呈する。

V．結語

i　中世墓に関する試察

今回検出された中世墓は深谷市の初の発掘調査例である。そこで現時点で判明している事項について再整理してみた。なお、文中の遺物には報文中の遺物番号を用いている。

①墳墓より盛土と積石が検出された。

②主体部は火葬人骨が4体分埋葬され、3体分が蔵骨器内、1体分が積石下土壙に埋納されていた。

③蔵骨器は全て壷型土器を利用している。

④蔵骨器の確認時、蔵骨器(1)には覆土の混入が全く認められず、蔵骨器(2)には少量の覆土及び水の混入が認められた。蔵骨器(3)は多量の覆土と共に偏平な円礫が蓋状に詰められていた。

⑤蔵骨器下位付近の覆土中より青磁破片が出土した。

⑥板碑2基が出土した。

⑦確認された板碑とは状態が異なる緑泥片岩の破片が出土している。

⑧加工された形跡を有する角閃岩質安山岩が多数出土している。

次に以上の8項目を用いて若干の考察を加えてみたい。

○墳墓の構造について

度々記述した通り、土層の明確な把握がほぼ不可能な状態であったが、断面上には炭化物層と、その外側のほぼ同一レベルにおける数点の円礫を確認している。円礫は上層出土のそれと近似しており、確認レベルは対面の積石部と殆ど同じである。確認面の浅さから耕作時の掘削の影響を考慮せねばならないが、この円礫の何れにも掘削時の損傷が認められず、墳墓構築時に近い状態である可能性が高い。炭化物層の形成についても同様である。一方、⑦の板碑(1)は、少なくとも倒れた時点の墳墓上面を示している。この事より、盛土が最低20cmは存在したと考えられる。積石は調査時点では部分的残存だが、構築時には主体部を中心に敷き詰められていた可能性が高い。これは元の地主である飯島氏御一家の話から墳墓周辺の耕作時に限り多量の円礫が出土し、それらを全て調査区北側の農道の整地に使用した事が判明した事による。農道の円礫は出土したそれと近似しており、確認範囲は幅約2m、長さ10m以上に及んでいる。墳墓における円礫の敷設範囲や形態は不明だが、農道上の円礫の数量や飯島氏の話からこの墳墓における「かなり多量の」円礫の使用が推定できる。同様の事例が大里郡川本町の畠山重忠墓、岡部町の岡部六弥太墓において確認されている事からもその可能性は高いだろう。上部は⑦、⑨の通りである。⑦の板碑(2)は基部が埋設状態で出土しており、この板碑が南西、現在の上敷免・新井の集落方向に表を向けて造立されていた事が分かる。板碑(1)も同様であった可能性も有る。また、⑧は他の板碑の存在の可能性も示唆している。⑨には地輪らしき破片が認められ、五輪塔造立の可能性も有る。

○主体部について

主体部の平面プラン、掘り方等は不明である。しかし、②で確認した蔵骨器(1)及び(2)は位置が極めて近いものの、レベル差が約10cm存在しており、(2)→(1)という埋葬の時間差も考えられる。蔵骨器(3)については確認調査時に上がってしまったため正確な位置が不明であるが、バケットの掘削範囲から推定すると、位置的には2m以上離れており、埋納地点が独立する可能性が有る。また、積石下土壙内出土の人骨も埋納地点は独立しており、これらの事柄から主体部が最大で4箇所存在した計算となる。埋葬形態の差異から追葬の行われた可能性が高い。

○蔵骨器について

3個体は全て所謂「在地系土器」である。これについては、神奈川考古同人会による資料集成と分析がなされて以降（1986）、浅野晴樹氏の考察（浅野　1988）にみられる様な、地域的な資料集成と分析が中心となりつつある。しかし、その地域的・時期的背景とその変遷を明らかにし得るまでには未だ至っていない。そのため、今回の発掘調査において出土した資料についても詳細には不明な点が多い。これまでに行われた考察に例を採って考えてみると、(1)及び(3)は、共に14世紀前半～中半期の所産と見做す事が出来そうである。但し、充分な分析が成されていない現状では形態等の諸要素による時間的位置を認定するには問題がある。例えば前述浅野氏の考察に拠れば、(1)には広めの口縁径と、やや長胴化した胴形という新旧両要素が存在しており、(3)にも器形的な新しい要素を持ちながらも、胴形の偏平化という特徴は弱いという古い要素も残している。生産地、流通経路等の未解明な現時点では形態差等＝時間差と見做す根拠は薄弱であり、問題点も多い。ほぼ同時期の所産と考えるのが妥当であろう。また、(2)についても筆者は未だ類例を見出しておらず、具体的な時期判定は困難である

が、その出土状態から、(1)・(3)と同時期の所産と考えられよう。今後は出土地域の分布状態に関する資料のより一層の集積と、各個体資料に内包される形態・整形・調整・焼成等の諸要素の差異の比較検討より、成立過程の違いを、その生産地、流通経路等、更には周辺地域の地理的・歴史的位置の観点から考察していく事が課題といえるだろう。③では、内部円礫下から出土した土器片が口縁の欠損部に接合した。これは口縁部の欠損と円礫の充填が殆ど同時であった事を示しているものと思われる。その際内部の人骨を一部取り出したらしく他の蔵骨器に比べてその量が少ない。壷型土器の稀少性か、埋葬時の状況の緊急性（或いは応急性）の為か、興味深い点である。また、この事は同時に蔵骨器に口縁部を覆うタイプの蓋の存在を示している。⑦より蓋石の存在の可能性も考えられるのではないだろうか。また、これとは別に鉢類（第８図１）を蓋とした場合も考られよう。

○被葬者について

個体数は現時点で４体分を確認している。これは頭部（特に下顎骨）から算出したものである。報文中では５箇所より人骨が出土しているが、火葬骨集中地点(1)検出の人骨については、他と比べて少量である上、単独で１体とし得る具体的部位が確認できず、除外してある（他の出土地点との関連は現時点では不明）。被葬者は全て成人と思われるが、更に詳細な分析を待たねばならない。

○構築時期について

この墳墓に関する記録は現時点では未確認のため、詳細は不明である。しかし、蔵骨器とされた壷型土器の製作から蔵骨器としての使用までの時間幅を考慮すると、14世紀中半以降が考えられる。また、④の青磁片はその胎土、釉薬の色調などから、元代末期より明代初頭の可能性が高く、この14世紀中半を上限とする時期設定に大差無いものと思われる。⑥の板碑は塔身部を欠失しており、造立年代は不明である。しかし板碑(2)を埋設した覆土は主体部とは明らかに異なっており、構築から造立までに時間差が想定される。これが追葬の墓碑か追善供養の供養塔かは不明である。蔵骨器も含めて、全被葬者の埋葬が完了するまでにも14世紀後半を限度とした時間枠が設定できよう。

○調査区周辺の状況(1)－確認された資料より－

本調査区の北東の沼尻、南東の新井の集落内において、20基の板碑の存在が確認されている（埼玉県立歴史資料館　1981）。内訳は沼尻地内に４基、新井地内に16基である。沼尻地内の４基の内１基は延命寺境内に、残る３基は大木政夫氏宅に所在しており、新井地内の16基の内、４基は植竹家墓地、２基は笠原家墓地、６基は福島重雄氏宅、４基は湯本圭司氏宅に所在している。これらの内、年紀を明瞭に残す板碑は７基（沼尻地内に１基、新井地内に６基）で、13世紀中の造立が１基、14世紀中の造立が３基、15世紀中の造立が２基、16世紀中の造立が２基、となっている。資料数の少なさ故、これを論拠とするには薄弱ではあるが、この付近でも13世紀～16世紀にかけて板碑が造立されていた事は確実である。また、これらの板碑は殆どが個人の住宅又は墓地における確認であり、寺院への集合はなされていない事も特徴といえるであろう。

○調査区周辺の状況(2)－歴史的背景－

第１図を参照して頂きたい。本調査区周辺には中世の遺跡が殆ど無いことが分かる。最も近い新開荒次郎実重館跡が小山川の対岸、直線距離にして約1.5kmの位置に所在しているが、この館は12世紀末～13世紀初頭のものの可能性が強く、今回検出された中世墓とは約１世紀の時間差が生じる事とな

る。14世紀当時の内ケ島氏、蓮沼氏、荏原氏の館は、ここより3.5～6.0kmの距離にあり、直接的な関連は考え難い。また、周辺地域の寺院等、例えば前述の延命寺も、その開基、開山等を伝えていないため、この近辺の動向、例えばこの地域を根拠地とした豪族の存在も確認できていない。

この墳墓の構築時期である14世紀後半、南北朝時代には、武蔵武士団が足利氏の支配下に置かれつつあり、深谷市でも、関東管領（後に鎌倉公方）足利基氏に従う関東執事（後に関東管領）上杉憲顕の子、憲英が庁鼻和城を開き、深谷上杉氏の基盤が確立されようとしていた時期である。この様な時代の移行期にあって、周辺地域でも戦乱が絶えず、従ってその様な戦闘に伴う戦死者供養のために、この様な墓が構築されていた可能性も考えていく必要があるだろう。

ii　土葬人骨について

身長が150cm前後の小柄な人物であったと思われる。また、検出された歯の摩耗状態から考えて成年の域に達している可能性が高い。しかし、遺存状態が極めて悪く、Binder №15塗布による硬化処理を施したにも係わらず、取り上げた段階で全て小片になってしまった。詳細は不明である。副葬品も無く、埋葬時の土壙の形状等も明確ではないため、中世墓との時間的関係も明確ではなく、具体的な埋葬時期については全く不明である。

iii　その他の出土遺物について

出土した土器はいずれも７世紀末より10世紀初頭に至る時期の所産である。包含層形成の状態から、当時の小山川上流域よりの流れ込みによるものと思われる。上流域では、Ⅱ章で述べた上敷免・上敷免北遺跡における集落が該期に形成・存続している事が明らかとなっている。また、Ｂ区出土の坩堝片は、上流域における製鉄遺構の存在を暗示しているが、やはり上敷免北遺跡において坩堝の出土が報告されており、その存在がより一層明確なものとなっている。また、Ｃ区出土で後期の所産と思われる縄文土器片やＡ区出土の石鏃などからも、周辺に該期の遺跡の存在を示唆しているものといえよう。

以上、結語とするにはかなり散文的になってしまったが、今回の発掘調査の結果について若干の整理をし得たものと思われる。しかし、筆者の浅学故の不手際、考察不足により、数々の問題点が残されている。末筆ながら記してご容赦を乞い、合わせて今後の御指導、御鞭撻をお願いする次第である。また、本報告書において不充分であった点については、後日、改めて報告する機会を持ちたいと思う次第である。

参考文献

浅野晴樹　『関東における中世在地産土器について』「研究紀要　第４号」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1988

「埼玉県板石塔婆調査報告書」　埼玉県立歴史資料館　1981

1．遺跡遠景（小山川堤防上より）
（左・小山川、右矢印・備前堀遺跡）

2．調査区全景（調査前、南方より）

3．調査区全景（北方より）

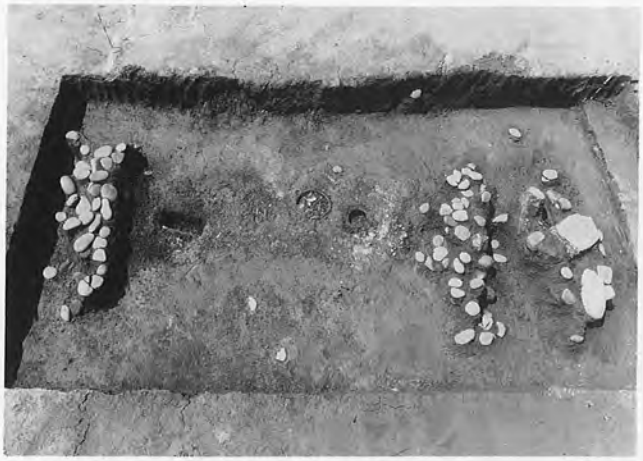
4．A区全景（南方より）

5．B区全景（東方より）

6．C区全景（西方より）

7．作業風景（A区・西方より）

写真図版　2



1．A区・中世墓全景（北方より）

2．蔵骨器(3)（確認調査時出土状態）

3．蔵骨器(1)(2)及び火葬骨集中地点(1)検出状態

4．火葬骨集中地点(1)検出状態

5．積石及び板碑(1)出土状態

6．積石及び板碑(2)出土状態

7．板碑(1)出土状態

8．板碑(2)基部埋設状態

1．土葬人骨出土状態（東方より）

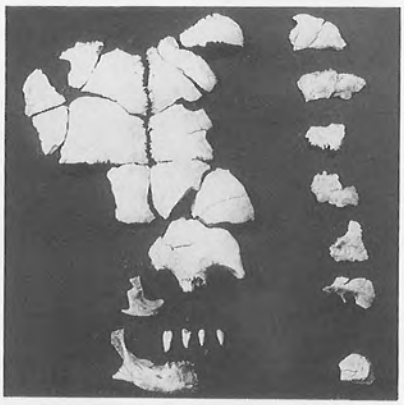
2．同（南方より）

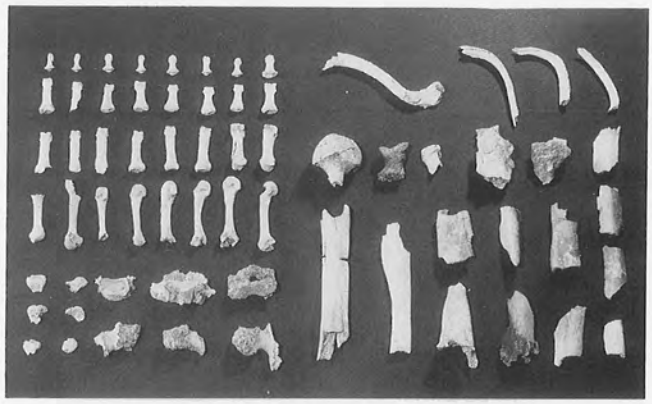
3．同（上方より）

4．同（南東方より）

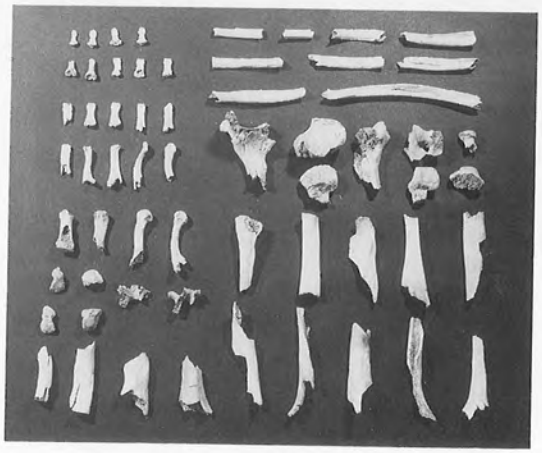
5．同（頭部拡大）

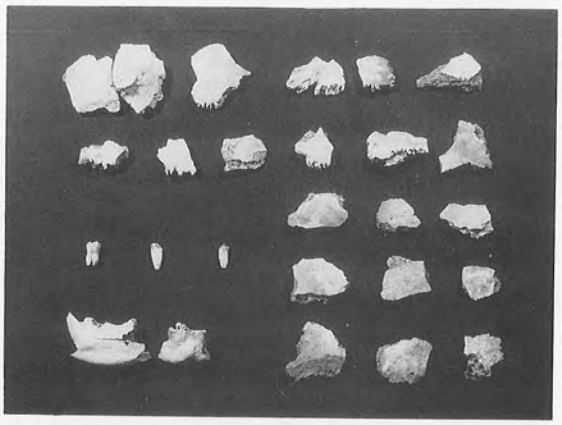
1．蔵骨器(1)及び人骨
（左・蔵骨器、下・同内収納人骨）

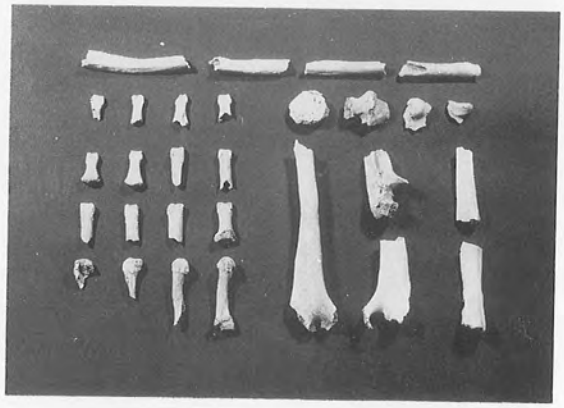




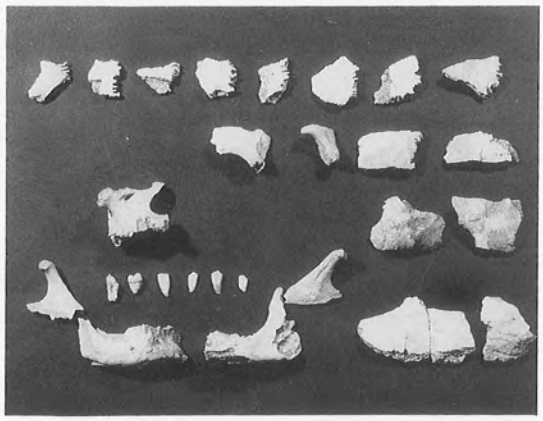
2．蔵骨器(2)及び人骨
（左・蔵骨器、下・同内収納人骨）







1．蔵骨器(3)及び人骨（左上・蔵骨器、同下・円礫充填状態、右上下・同内収納人骨）



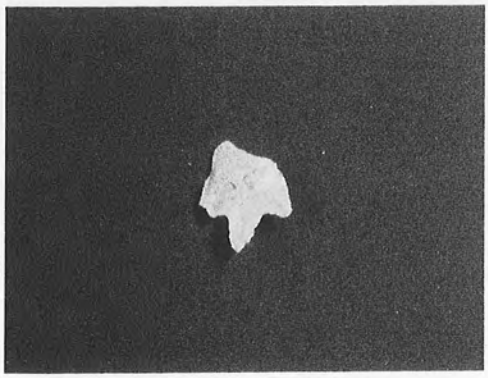
2．人骨集中地点(2)内埋納人骨

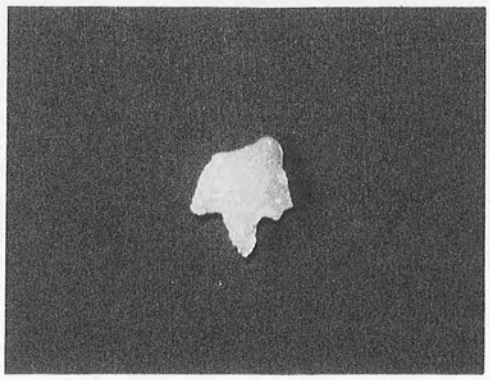
写真図版　6

1．A区出土青磁破片

2．A区出土灰釉陶器破片

3．A区出土土器破片及び石製品





4．A区出土石鏃（表・裏）

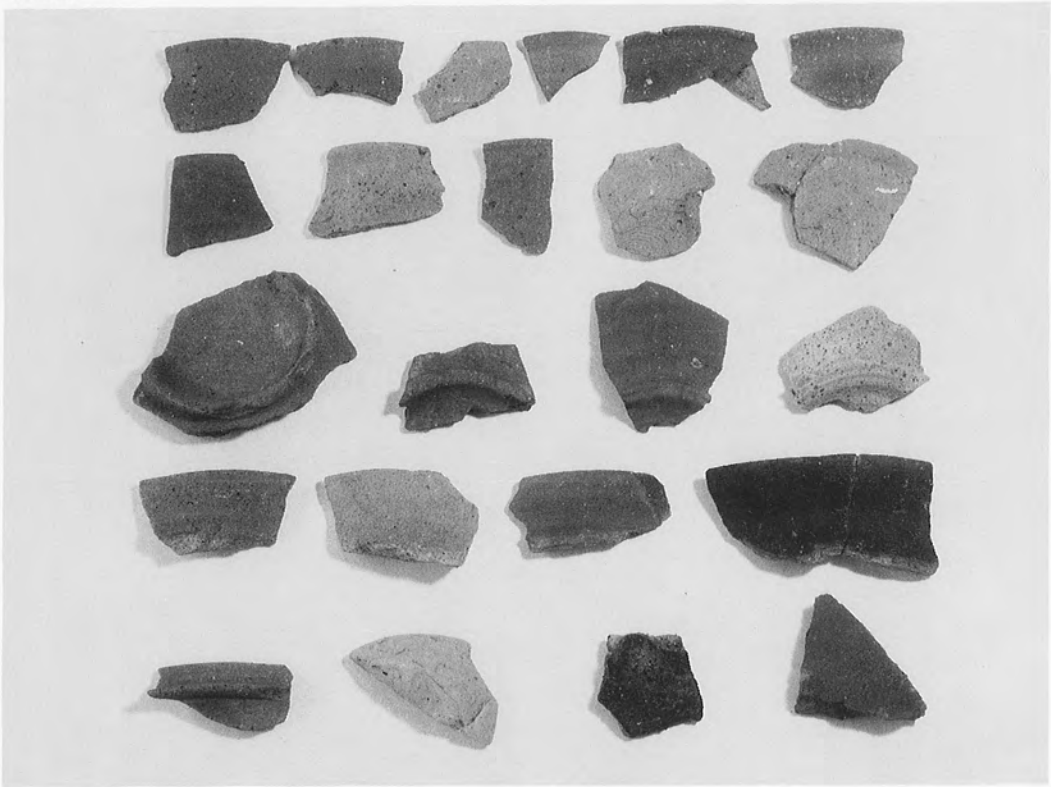
1．板碑(1)

2．板碑(2)

3．板碑(1)金彩部分拡大（中央折損部上端）

4．石造物残欠

5．石造物残欠



1．B・C区出土土器破片

2．B区出土陶器破片

3．C区出土陶器破片

4．B区出土坩堝破片

5．C区出土角釘

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第25集
備　前　堀　端　遺　跡

印刷　平成２年３月23日
発行　平成２年３月30日
発　行　深　谷　市　教　育　委　員　会
印　刷　大　屋　印　刷　株　式　会　社

「備前堀端遺跡」　正誤表

訂正箇所	誤	正
例言－1	…埼玉県深谷市大字沼尻備前堀端… …備前堀端遺跡とした。	…埼玉県深谷市大字沼尻字備前堀端… …備前堀端遺跡発掘調査とした。
P6　34行目 P14　31行目	…小石を少量含みやや粗い色調は… 瓶らしき…	…小石を少量含みやや粗い。色調は… 甕らしき …
第12図	B区第3トレンチ　2の土層注記内「…しまり…粘性…」は、3の土層注記	